

高山の文化を高めた人々 47

飛驒の暮らしを写真で残す
写真家 木下 好枝
都竹 祥子

行事や風土、豪雪の中で生きる村人の姿が見事に描き出されています。そして木下さんの素敵な文章もさることながら、村人から心から好かれていたことが良く分かる優れた写真集になりました。

*

女性写真家 木下好枝さんが逝って今年で五年になりました。飛驒に生まれ育った彼女は、写真家の細江光洋氏に師事し、飛驒の人々のさりげない生活を撮り続けてきました。昭和四十八年ころから山村（飛驒市神岡町）を被写体に、厳しい気候や風土に生きる素朴な村人の生活を十年余り撮り続けました。

雪の伊西峠を歩いて越えたり、お堂に野宿したりして撮りまとめた写真が一九九一年、山と溪谷社から写真集『わたしの奥飛驒』として結晶しました。この時、高山市の地場産業センターで写真展も開催され、飛驒の原風景や風習を記録した数多くの作品を大勢の人たちに見てもらうことができました。

写真集の中には、今は失われてしまった飛驒の



ありし日の木下さん(岐阜新聞提供)

した。

*

木下さんを語る時に欠かせないのは、写真ともう一つはお酒です。煙草を吸い、飲むほどに話が弾み、男性的な考え方と飲みっぷりの良さもあって、よそ者を警戒する村人たちに溶け込むには時間がかからなかったようです。結婚式や法事などに合わせて村を訪れる彼女に村人は「昼飯でも食っていかんけな」と声をかけるまでになりました。茶道を通じて出会った私たちは、登山や撮影旅行などに出かけ、よく抹茶をたてました。冷たい谷水で飲むととても美味しく、また山の稜線などでコーヒーを沸かし、のんびり登山を楽しんだものです。こんな時にも彼女はウイスキーや日本酒を忘れませんでした。

その後、四十年余り撮り続けてきたネガフィルムの整理にかかり、次は高山線沿線の生活風土を撮るとはりきっていたのですが、病魔が彼女を襲いました。このため木下さんが写したたくさんのネガは高山市の郷土館に寄贈されました。

*



山之村で撮影した「雪の日」(岐阜新聞提供)

今、木下さんの生き様を思うとき、「ポポロ」という喫茶店が思い出されます。その店主の牧下一己さんは、フルトベングラが大好きで、画家・歌人・登山家としていろいろな人たちと交流がありました。神岡の鉱山で働いていた牧下さんから教えられた伊西峠のトンネルの向こうにある山之村の話は、彼女にとつてユートピアに思えたのでしょうか。同じ六十五歳で亡くなった二人は、きつとカメラを首にかけ、好きなお酒を持って遠く北ノ俣岳を望む伊西峠を「千の風」になつて越えたことでしょう。

*

彼女は写真集『わたしの奥飛驒』にサインを頼まれるといつも次の言葉を書いていました。

「生きて己を知る 友皆師」

語りたき人は遠くに五月雨断ち切れぬ友の思い出露の秋

都竹祥子



上高地にて(筆者左)